

当たり前は幸せのシンボル

伊勢崎市立第二中学校 三年

松田 直也

「重い病気だ。すぐに入院してくれ！」中学一年の僕は最初、先生の言っていることがわからなかった。わかりたくなかった。でも「すぐに退院できるだろう」という希望も心の中にあつた：が、視界に入った父と母の顔が暗い。それを見るだけで深刻さが伝わってきた。そんな僕に追い討ちをかけるように先生がまた言った。「最低でも一年は入院をしなくちゃいけない。」「ドクン」と経験したことのない鼓動。涙で視界が見えなくなった。こんな悪い夢、早く覚めてくれと願ったが、僕はもうこの現実と向き合うしかなかった。

始まった治療では、ほぼ毎日のように採血で針を刺され、化学療法の治療で髪も抜けた。気持ち悪くて、体中が痛かった。四十二度の高熱が何日も続き、熱のせいで自分の名前もわからない。僕はなんでここにいるのだろう、僕はなんで生きているのだろうと、自分で自分がわからなくなるく

らいづらかった。体はどんどんやせ細って体重は二十キロ近く落ち、自力でベッドから起き上がることも、立つこともすらもできなくなった。体のつらさはもちろんだったが、毎日仲間とやっていた野球ができないこと、週三で頑張っていた水泳ができないこと、大好きな友達に会えないことがすごくすごくつらかった。

病気がわかってから母は「もっと早く気づいてあげられたら」。とずっと後悔の言葉を口にしていった。母は何も悪くないし、自分を責める必要なんて一ミリもない。だから苦しい気持ちは自分の心の中にしまっただけで言わなかった。今叶わないとわかって口にするのはわがままで、これ以上、母を傷つけるようなことはしたくなかった。僕が母を思っている何倍も、母は僕を大切に思ってくれていることが、このときほどありがたかった。思ったことはなかったから。

母と同じくらい僕を支えてくれたのが友達だった。特に野球の仲間のメッセージは心に響いた。「また一緒に野球をやろう」この言葉が本当に僕に勇気をくれたし、頑張る理由もくれた。あのとき当たり前のように隣りにいた友達、たくさんの人のおかげで病気と闘い続け、前に踏み出すこと

ができた。そして入院してから約一年。やっと退院の日が決まった。久しぶりに帰った家は、少し不思議な感じだったが、兄弟との会話が絶えず、夜はみんなでごはんを食べて、隣りに家族がいることがどんなに大切な時なのか、当たり前前の幸せをかみしめた。

本当に死ぬかもしれないという瀬戸際に立った時、初めて僕は自分の命と向き合った。そして、命の尊さ、大切さを知った僕だからこそ日々大事にしていることがある。それは、とにかく物事を後回しにしないこと。前までは「後でやる」が多かったが、今は「その時にやる」がとても増えた。僕の身体を心配する人は、「今後のことを考えると今は無理をしないほうがいい」と言う。だけど僕は今を思い切り生きて、今色々なことに挑戦していきたい。時間を大切にすることは、命を大切にするのだと学んだからだ。生きているからこそ幸せだと気づけた今の僕なら、これからの人生の中で出会う、苦しいことやつらいことを乗り越えられる自信がある。

そんな僕にこれからできることは何だろう。考えているうちに、僕の中にいつしか救急救命士になりたいという夢が生まれた。つらい闘病生活の

中で、自分がくじけそうになった時、落ちこんだ時に、担当医の先生たちが明るく、温かく励まし続けてくれた。命だけでなく心も救ってもらった。誰かを支える、応援することが、その人の「生きる希望」につながることを学んだ。だから自分が救ってもらったこの命を次は多くの人を助けるために使いたい。医者と救命士、形は違うが、どちらも命をつなぐ仕事だ。自分の行動で誰かの助けになりたい。それが今の僕の目標となった。

当たり前の中には、たくさんの幸せがある。家に帰ってご飯が食べられる、学校に行けば友達に会える、健康でいられる、好きな人ができる。これらの当たり前前の背景には誰かの支えがあることを決して忘れてはいけない。僕にとって、当たり前は、自分は一人じゃないことを感じさせてくれる、幸せのシンボルだ。当たり前だからこそ、つい見過ごしてしまうような一つ一つの出来事にも心の底から感謝をして日々を大切に生きていきたい。それが、僕に与えられた命への恩返しだから。